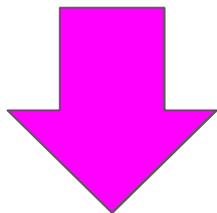


2022年度インカレミドル男子選手権クラスに適用される枠配分について

日本学生オリエンテーリング連盟幹事長 浴本悠貴

◎背景

2021年度ICMが行われたが、大学の規制により出場が叶わなかった東北大より「2021年度ICM男子選手権クラスの結果を2022年度ICMの枠配分に用いることは受け入れがたい」とする意見書が届いた。



日本学連幹事会にて議論

今回の議題は幹事会で議決を取るべきではなく、総会にあげて投票を行って決めるべきであると判断した。

◎案

日本学連幹事会推薦案

①北東学連以外2021ICMの結果を用い、北東学連はICL2022の結果を用いる

※個人実績枠については2021ICMの結果を用います

※母数を変えると本年度だけのはずの特例措置が複数年にわたって影響が及ぶこととなるため、母数は規約通り 30人とします。

メリット

- ・著しい不利益を受けた北東学連を救済できる

デメリット

- ・地区によって適用するインカレの大会が異なる

◎案

日本学連幹事会推薦案

①北東学連以外2021ICMの結果を用い、北東学連はICL2022の結果を用いる

※個人実績枠については2021ICMの結果を用います

※母数を変えると本年度だけのはずの特例措置が複数年にわたって影響が及ぶこととなるため、母数は規約通り0人とします。

幹事会がこちらの案を推薦する理由

枠配分数に絡んでくる議論である以上、各地区の恣意が入ってしまう。

一方、幹事会は各地区のメンバーが集まって議論している以上、各大学よりフラットな立場で議論することができる。

その立場で検討した際に、北東学連の著しい不利益を認め、救済措置を行う必要があると考えた。

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)

メリット

- ・規約に基づいて枠配分数を決めることができる
- ・学連ごとに違うインカレの結果を適用するという不公平さがない

デメリット

- ・北東学連の著しい不利益を救済することができない

※北東学連男子選手権クラスでは、当初出場予定だった10人の選手のうち、7割にあたる7名の選手が大学の規制により、出場することが叶わなかった。

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする

日学枠とは:コロナウイルスの影響により、各地区学連によるセレクションに不公平性があることを前提として、セレクションで漏れてしまった有力選手の自己推薦による選考

[ICL2020に関する特別枠.docx - Google ドキュメント](#)

メリット

- ・大学の規制により、2021ICMに出場できなかった大学がある、北東学連以外の地区も救済できる

デメリット

- ・日学枠の使用が常態化してしまう
- ・推薦を決定する人的コストが大きい
- ・この日学枠を通過するのは上位選手のみなので、セレボーダーの選手には意味がない

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる

※個人実績枠についてはCM2021の結果を参照する

※母数を変えると本年度だけのはずの特例措置が複数年にわたって影響が及ぶこととなるため、母数は規約通り 30人とします。

メリット

- ・全ての地区が同じインカレの結果を用いることができる
- ・後出しでの議論がなくなる

デメリット

- ・ICM2021が成立したにも関わらず、全く規約通りの枠配分を行うことができない

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる

メリット

- ・各地区が同じインカレの結果を参照することができる
- ・大学の規制により、2021ICMに出場できなかった大学がある、北東学連以外の地区も救済できる

デメリット

- ・本来規約にはない日学枠の使用が常態化してしまう
- ・本来救済したいはずの出場できなかった選手が日学枠を利用して救済されない可能性があり、そうなった場合日学枠を採用した意味がなくなる

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

⑥技術委員会に委ねる

- 2022年度ICM枠配分の方法を技術委員会が決める

技術委員会：学生オリエンテーリング界の競技面においてアドバイスをを行う学生の関与していない第三者機関

メリット

- ・第三者機関に判断を下してもらうので、各地区の恣意的判断が入らない

デメリット

- ・学生として納得できない結果になる恐れがある

◎案

日本学連幹事会推薦案に反対の場合の案

- ②従来通り規約を適用(全学連が2021ICMの結果を用いる)
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる
- ⑥技術委員会に委ねる
- ⑦その他

◎今後のフロー

意見公募期間

10/4-10/11

浴本(uofjec@gmail.com)までご意見をお寄せください。

投票受付期間

10/12-10/19

後日マイユニバスにて流すグーグルフォームよりご回答ください。

⇒10/20に投票結果をお知らせいたします。

①-⑥(⑦)の案で最も票を集めたものを2022年度インカレミドル男子選手権クラスに適用される枠配分とします。

2023年度インカレの枠配分について 用いられる基準について

22年度日本学連幹事長 浴本悠貴

◎背景

・従来の規約では、前年度インカレの同一種目に基づき、枠を配分することとなっている。その趣旨としては、各地区の競技力を反映するのに最も適しているのが昨年度のインカレであることが挙げられる。

・しかし、当初出場予定だった選手が大量に出場できなくなった場合、各地区の競技力を正確に反映しているということができない。

⇒事前に今年度のインカレの結果を来年度の枠配分に用いるための基準を設けるべき

◎枠配分方法に関する案

- ①従来通り、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ②当初選手権クラスに出場予定だった選手のうち、全体で7割かつ特定の地区で6割の選手が出場できれば、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ③従来通り枠配分を行った上で、本人の帰責に寄らない事由(ex, 大学の規制)により出場できない学校があった場合、その大学が所属する学連の当初の選手権クラス出場人数×3割を来年の地区学連に付与
- ④3のケースで当初出場予定ではなかった人に枠獲得の権利を与えない

◎枠配分方法に関する案

- ①従来通り、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ②当初選手権クラスに出場予定だった選手のうち、全体で7割かつ特定の地区で6割の選手が出場できれば、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ③従来通り枠配分を行った上で、本人の帰責に寄らない事由(ex, 大学の規制)により出場できない学校があった場合、その大学が所属する学連の当初の選手権クラス出場人数×3割を来年の地区学連に付与
- ④3のケースで当初出場予定ではなかった人に枠獲得の権利を与えない

①従来通り、今年度のインカレの結果を来年度に用いる

繰り上がり等を考慮せず、
インカレ選手権クラスに出
場した人の結果に基づい
て、来年度のインカレの枠
配分数を決める

第2条 競技者数と配分の対象

1. 競技者数は、男子 60 名、女子 30 名とし、これを第3条及び第4条の方法により、各地区学連に配分する（地区学連枠）。
2. 前年度スプリント6位までの者で、インカレ実施規則第4条1項の参加規定を満たす者は、前項の競技者数とは別に出場資格を得る（前年度個人実績枠）。

第3条 競技者数配分方法（男子）

1. 学連枠
12 名を各地区学連に 2 名ずつ配分する。
2. 前年度実績枠
48 名を前年度男子スプリントの実績を基に、以下の式により各地区学連に配分する。
地区学連の前年度実績枠の人数 =
$$\left(\text{当該地区学連前年度 30 位以内の人数} \right) \div \left(\text{前年度 30 位以内の総人数} \right) \times 48$$

但し、小数点以下は原則として切り捨て、48 名に欠ける人数分については、小数点以下の数値の大きい地区学連から順に配分する。

具体例：以下の状況で①を適用するところなる

2022年度インカレロング男子

北東学連：10

※その内、当初の出場者が6人、大学の規制により出場できなくなり、6人が繰り上がりとなった。

関東学連：30

※その内、当初の出場者が10人、大学の規制により出場できなくなり、10人が繰り上がりとなった。

北信越学連：2

※その内、当初の出場者が2人、大学の規制により出場できなくなり、2人が繰り上がりとなった。

東海学連：6

関西学連：10

中九四学連：2

2022年度インカレロングの結果 (30位以内の人数)

北東学連：5人

関東学連：15人

北信越学連：1人

東海学連：3人

関西学連：5人

中九四学連：1人

具体例：以下の状況で①を適用するところなる

2023年度インカレロングに適用される各地区の枠配分数

$$\text{北東学連} : 2(\text{学連枠}) + 5/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 10$$

$$\text{関東学連} : 2(\text{学連枠}) + 15/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 26$$

$$\text{北信越学連} : 2(\text{学連枠}) + 1/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 2.625$$

$$\text{東海学連} : 2(\text{学連枠}) + 3/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 6.8$$

$$\text{関西学連} : 2(\text{学連枠}) + 5/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 10$$

$$\text{中九四学連} : 2(\text{学連枠}) + 1/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 2.625$$

※わかりやすさのため、個人実績枠を考慮しておりません。

◎枠配分方法に関する案

①従来通り、今年度のインカレの結果を来年度に用いる

②当初選手権クラスに出場予定だった選手のうち、全体で7割かつ特定の地区で6割の選手が出場できれば、今年度のインカレの結果を来年度に用いる

③従来通り枠配分を行った上で、本人の帰責に寄らない事由(ex, 大学の規制)により出場できない学校があった場合、その大学が所属する学連の当初の選手権クラス出場人数×3割を来年の地区学連に付与

④3のケースで当初出場予定ではなかった人に枠獲得の権利を与えない

②当初選手権クラスに出場予定だった選手のうち、全体で7割かつ特定の地区で6割の選手が出場できれば、今年度のインカレの結果を来年度に用いる

特定の地区とは：学連枠（男子2，女子1で元々割り振られてる枠）よりも多く枠が配分されている地区

1つの地区学連でも6割という基準を満たさなかった場合、後述の③か④を使うこととなります。

具体例：以下の状況で②を適用するところなる

2022年度インカレロング男子

北東学連：10

※その内、当初の出場者が2人、大学の規制により出場できなくなり、2人が繰り上がりとなった。

関東学連：30

※その内、当初の出場者が10人、大学の規制により出場できなくなり、10人が繰り上がりとなった。

北信越学連：2

※その内、当初の出場者が2人、大学の規制により出場できなくなり、2人が繰り上がりとなった。

東海学連：6

関西学連：10

中九四学連：2

2022年度インカレロングの結果 (30位以内の人数)

北東学連：5人

関東学連：15人

北信越学連：1人

東海学連：3人

関西学連：5人

中九四学連：1人

具体例：以下の状況で②を適用するところなる

全体：60人のうち、14人の選手が当初インカレ選手権クラスに出場予定ではなかった。⇒全体で7割の選手が当初インカレ選手権クラスに出場予定だった選手である。

北東学連：当初インカレ選手権クラスに出場予定だった選手のうち、8割出場

関東学連：2/3(6割6分)

北信越学連：0割。ただし、もともと北信越学連男子に割り振られていた枠は学連枠のみであったため、考慮に入れない。

東海学連：10割

関西学連：10割

中九四学連：10割

⇒特定の地区で6割の選手が出場できている。

⇒2022年度のインカレロングの結果を2023年度インカレロングの枠配分に用いることとなる

(その際の枠配分計算は従来通りとなる)

◎枠配分方法に関する案

- ①従来通り、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ②当初選手権クラスに出場予定だった選手のうち、全体で7割かつ特定の地区で6割の選手が出場できれば、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ③従来通り枠配分を行った上で、本人の帰責に寄らない事由(ex, 大学の規制)により出場できない学校があった場合、その大学が所属する学連の当初の選手権クラス出場人数×3割を来年の地区学連に付与
- ④3のケースで当初出場予定ではなかった人に枠獲得の権利を与えない

③従来通り枠配分を行った上で、本人の帰責に寄らない事由(ex,大学の規制)により出場できない学校があった場合、その当該大学が所属する学連の当初の選手権クラス出場人数×3割を来年の地区学連に付与

- インカレ選手権クラスに出場できない地区に対して救済の度合いが大きい措置

本人の帰責に寄らない事由とは:

ex,大学の規制

個人の体調不良や天候によりインカレ選手権クラスに出場できない場合は本人の帰責に寄らない事由とは言えないので注意。

小数点以下の値になった場合は四捨五入とする。

具体例：以下の状況で③を適用するところなる

2022年度インカレロング男子

北東学連：10

※その内、当初の出場者が6人、大学の規制により出場できなくなり、6人が繰り上がりとなった。

関東学連：30

※その内、当初の出場者が10人、大学の規制により出場できなくなり、10人が繰り上がりとなった。

北信越学連：2

※その内、当初の出場者が1人、大学の規制により出場できなくなり、1人が繰り上がりとなった。

東海学連：6

関西学連：10

中九四学連：2

2022年度インカレロングの結果 (30位以内の人数)

北東学連：5人

関東学連：15人

北信越学連：1人

東海学連：3人

関西学連：5人

中九四学連：1人

具体例：以下の状況で③を適用するところなる

2023年度インカレロングに適用される各地区の枠配分数

北東学連: $2(\text{学連枠}) + 5/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 10$

$+ 6 \times 0.3(\text{救済枠}) = 1.8 \Rightarrow 2$

関東学連: $2(\text{学連枠}) + 15/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 26$

$+ 10 \times 0.3(\text{救済枠}) = 3$

北信越学連: $2(\text{学連枠}) + 1/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 3.6$

$+ 1 \times 0.3(\text{救済枠}) = 0.3 \Rightarrow 0$

東海学連: $2(\text{学連枠}) + 3/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 6.8$

関西学連: $2(\text{学連枠}) + 5/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 10$

中九四学連: $2(\text{学連枠}) + 1/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 3.6$

◎枠配分方法に関する案

- ①従来通り、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ②当初選手権クラスに出場予定だった選手のうち、全体で7割かつ特定の地区で6割の選手が出場できれば、今年度のインカレの結果を来年度に用いる
- ③従来通り枠配分を行った上で、本人の帰責に寄らない事由(ex, 大学の規制)により出場できない学校があった場合、その大学が所属する学連の当初の選手権クラス出場人数×3割を来年の地区学連に付与
- ④3のケースで当初出場予定ではなかった人に枠獲得の権利を与えない

④3のケースで当初出場予定ではなかった人に枠獲得の権利を与えない

- ③の措置よりは救済度合いが小さい

- 繰り上がりの選手が入賞した場合、個人実績枠は与えられますが、地区学連枠は与えられません。

理由:今回は各地区学連の実力を反映することが目的であり、個人実績枠は枠配分に影響しないため。

(例:関東学連の繰り上がりの選手(2年)が5位入賞を果たした場合、その選手は来年度のインカレのエリートクラスに出場できますが、地区学連枠の計算には用いられません。)

具体例：以下の状況で④を適用するところなる

※③の具体例と数値は全く同じにしています

2022年度インカレロング男子

北東学連：10

※その内、当初の出場者が6人、大学の規制により出場できなくなり、6人が繰り上がりとなった。

関東学連：30

※その内、当初の出場者が10人、大学の規制により出場できなくなり、10人が繰り上がりとなった。

北信越学連：2

※その内、当初の出場者が1人、大学の規制により出場できなくなり、1人が繰り上がりとなった。

東海学連：6

関西学連：10

中九四学連：2

2022年度インカレロングの結果 (30位以内の人数)

北東学連：5人(うち、繰り上がりの選手 1人)

関東学連：15人(うち、繰り上がりの選手 5人)

北信越学連：1人(うち、繰り上がりの選手 0人)

東海学連：3人

関西学連：5人

中九四学連：1人

具体例：以下の状況で④を適用するところなる

※③と結果の違う部分を赤字にしています

2023年度インカレロングに適用される各地区の枠配分数

$$\text{北東学連: } 2(\text{学連枠}) + 4/24 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 10$$

$$+ 6 \times 0.3(\text{救済枠}) = 1.8 \Rightarrow 2$$

$$\text{関東学連: } 2(\text{学連枠}) + 10/24 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 22$$

$$+ 10 \times 0.3(\text{救済枠}) = 3$$

$$\text{北信越学連: } 2(\text{学連枠}) + 1/24 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 4$$

$$+ 1 \times 0.3(\text{救済枠}) = 0.3 \Rightarrow 0$$

$$\text{東海学連: } 2(\text{学連枠}) + 3/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 6.8$$

$$\text{関西学連: } 2(\text{学連枠}) + 5/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 10$$

$$\text{中九四学連: } 2(\text{学連枠}) + 1/30 \times 48(\text{前年度実績枠}) = 3.6$$

個人実績枠について

個人実績枠は繰り上がりの選手でも獲得することができます！

◎今後のフロー

意見公募期間

10/4-10/11

浴本(uofjec@gmail.com)までご意見をお寄せください。

投票受付期間

10/12-10/19

後日マイユニバスにて流すグーグルフォームよりご回答ください。

⇒10/20に投票結果をお知らせいたします。

学連版権地図を団体が全面改訂する場合の規定

2020年度幹事会で話し合ったことを改めて成文化（今般2件の申請があったのを機に）

2022.8.28 学連版権地図指定管理者 YMOE山川

0.この規定は日本学連版権地図を、傘下団体（地区学連、加盟校を想定、以下団体）が全面改訂をして競技会を開催する場合に適用する。（話し合いは2020年度幹事会）

1.この規定の適用期間は、日本学連の版権地図の指定管理者が幹事会に報告した時点から当該大会が終了するまでとする。（幹事会報告か幹事会決議（ネット決議ok）のどちらにするか？そういえばドリームリレーの時も報告だけで進行させていたような）

2.この適用期間の間、団体への学連地図の版権代の支払いを免除する。

3.大会開催後の当該大会主催団体への特典はない。また、元の日本学連地図の管理運用方法に戻る。（特にここ2020年度幹事会で入念に話し合った部分）

4.10万円程度以下の地図修正費で済む場合は本規約を適用せず、通常の学連地図規約の元、当該イベント予算で支弁する。（今までのセクションとか）

5.それより少額のものについては、定期である学連地図現場判断地図修正予算（現状30万円）を適用

6.当該大会のコース外において、今後の練習会合宿において修正しないと支障があると思われる場合は2.と5.の規定を併用してもよいものとする。但し、明確な判断基準を幹事会に報告する義務を負う。（説明＝例えば今回の関東新人戦で使用しない範囲＝通常の練習会でも相当長いコース以外はめったに行かない範囲で、ちょっとやそっとじゃ修正不可能な大規模林道造成が発見された。ここは今回の新人戦の修正範囲とはせず、5の規定の地図修正予算の中で優先順位をつけて、のちにプロに依頼予定）

今までの適用例と今回申請の合計4つ

1.2020年度.KOLC大会、矢板日新、コロナで後にDreamリレー、

2.2021年度、名相大会、望郷の森、コロナで後に山川Dream、但しこのトレインは学連の利用権で正確には岐阜県協会の版権、また本年7/31をもって将来のビッグ大会開催のためにクローズトレインとした。

【2022年度今回適用申請報告】

3.関東学連新人戦、日光例幣使街道、9/7開催

4.KOLC大会、矢板山苗代、12/4開催

議論の背景説明

昨今はすでにトレイン飽和状態にあり、新規トレイン開発となるとかなりチャレンジアブルである。その中で例えばKOLCの筏場、東大OLKの足尾勝雲山など挑戦的なトレイン開発の成功例もみられるが、毎年うまくいくわけではない。最初のドリームリレーも挑戦的トレイン開発の断念から、大会運営だけはクラブの存続のために、短工期ですむ学連既存トレインの修正しがいのある場所を紹介してほしいで始まった。翌年、名相も望郷の森使用で同じコンセプトで申し出があった。（そもそも静岡大や名相が、富士山麓トレインやWOC2005のあと財産である三河高原の一連のトレインを使用する場合に地元県協会と版権関係の取り決めを話し合うとの状況は同じで、学連版権トレインも今後このようなシーンで再利用することが多くなってくると思われる。）

2年前は修正し甲斐があり、当該年度の予定とも支障がないトレインとして「矢板日新」を推薦した。今回は2団体から申請があり（KOLCはまたしても野望トレインを山梨県で断念）通常の練習会利用で大きな変化がみられる場所を紹介。（実はこれ3か所で、もう1か所が「毘沙門山」、5.の昨年度報告が遅れているが、練習会使用団体からもっと造成林道は多数あると報告が入り、プロが4日かかってやっと大規模造成林道とその周りの植生変化を修正した。その後練習会希望の団体がなく、ならばセレ利用が一番良いと

指定管理業者は判断した。

「日光例幣使街道」を最近使ったクラブからは経年変化が多く残念な地図という声が多く聞こえるようになってきました。ここは一番の最適新歓トレインであるだけにこの精度のままではまずいと判断。台風で崩れたところ以外はコンタを直す必要はなく、主に植生変化と特徴物がそこにあるかが調査対象

「矢板山苗代」は2年前に伊藤樹氏に修正依頼をしてミドルセレを行った場所ではあるが最近の練習会でここも大規模林道造成が入っている（修正なしで練習会は挙行）し植生の変化も激しいと報告されている。

それで、これらの修正作業は、プロに1日3万円払って直すよりも学生の手で皆で刺激会しあいながら調査の実地経験を積む方が将来の育成的にもよいのではないかというのがまず一点（短工期で一通りの経験が積める）、私もイカ地図を400円で売り続けるのは良心の呵責があり、学連も修正した地図で運用した方が勿論良いに決まっている。イカ地図に250円著作権料を乗せるよりこの制度を利用した方が、学連にとっても安く教育的効果も大きく地図が新しく更新される。つまりとても良い制度ということで三方両得になる。今後新規地図作成事業より適用例が増えていくと思われる。

あとは実情を一番知る指定管理業者と提案する団体との相談になるが、大元の幹事会に対して情報が開かれている必要がある。これを報告とするか幹事会決議とするかは2年前も曖昧のまま進めてしまったが、いったんここで立ち止まって話し合う機会としたい。

（とはいってももう大会が9/7に迫り、どちらの団体もハウス利用ですでに調査合宿を行っている状況）